

第八号

六月八日發行

# 東大斗争、 獄中書簡集

「ここにいる限り、パクられる心  
配はない」  
とふと考  
え、  
ア然としたことがある。  
独房の中にも睡棄すべき日常性が  
しおび込んでいたのである。

## 五月二十四日 中野より

目 次

工藤民男（山形大）

- 一、五月二十四日……中野より……工藤民男（山形大）…… 0  
二、五月二十三日……東拘より……渡辺黙男（東大）…… 3  
文共斗  
三、五月三十日……中野より……T君（東大J斗委）…… 4

四ヶ月前、対決迫る本郷へひとりのノンボリ・オポチニストが山形からやって来た。そして、生れてはじめてオポチニストの生き命たる退け時を忘れたために獄につながれた。解放講堂に残ったことにより、オポチニストはラジカリストになり得たか。そんなところから書き起こしていこうと思ひます。

△△△

- 四、五月二十七日……東拘より……湯島浩治（京大）…… 8  
五、四月二十四日……中野より……佐々木…………… 9…………… 10  
六、救対通信…………… 情宣部…………… 15
- 「獄中で闘う同志諸君」と呼びかけられる毎に、ぼくはちょっと複雑な気持になる。「獄中にいる」「斗っている」という等式が、ぼくにもあてはまるのかと考えてしまふのだ。山形で十数人の学友が教官の密告によって逮捕されたというニュースを聞いて、「ここにいる限りパクられる心配はない」と考へ、ア然としたことがあるからだ。独房の中にも唾棄すべき日常性がしおび込んでいたのである。以前デモしたりカッティングすることによって、左翼を取りをしていたのだが、行動の自由を奪われた今こそ、眞に自らの左翼性を問うていかなければと考へている。

△△△  
地裁の分離公判強行の弁「被告人の人権尊重のため」。勾留中に肉親を亡くした学友を釈放しない彼らの言う「人権」とは。血なまぐさい手ほど子どもの頭をなでたがる。

△△△

「わだつみの像」キャンペーンの愚劣さ。あらためて、自己の戦争責任追及をネグレクトしてきた大人ども（とりわけ、平和論者）のあさましさを感じる。こうした輩が「沖縄返還と新幹線を止めることと何の関係があるか」などとホザく。「沖縄を返せ！」と叫んだ翌日、ゴールデンウィークでございと新幹線に乗って行楽地へ——このゆるぎない日常性こそ沖縄人民抑圧への加担の姿なのだ。「かれらが平和を招待してカクテルを交しているとき／われわれは魂のなかにくろい火砲をひきずつている」（吉本隆明「首都人」）今やその火砲が火を吐き、偽りのカクテルグラスを粉ミジンに叩き割ったのが、4・28のあの斗いではなかった。

△△△

家族の問題は、多かれ少なかれ、ぼくらの共通になっていること、今までの書簡集で読みとれる。中でも4／1付の「帝国臣民に不安と絶望を」と叫ぶ学友（2号）や、4／16付の水上26号氏（4号）などの論に共感を覚える。ただ、ぼくはまだ父母を「足蹴」することはできない。「ひつそり肩を寄せあって生きる」という貧乏根性によるものかも知れない。先日、父が弟に手をひかれてはるばる面会にやつてきた。現在の父への回答を稚拙な詩にまとめてみた。

&&&&

あなたはあなたの属性になってしまった  
白い杖をコトコト鳴らして去つて行く

白い杖に頼りきつたあなたは  
ただのみじめつたらしい不具の老人

忍徒という偽りの地層を押し破って噴出した怨恨  
のマグマは  
白い杖を拒みつけようのなかつた怨命は  
どこに散り どこで冷えたのか

あなたからぼくへのたつたひとつのある遺産は

ああそれは白い杖とひきかえに失ったのだ  
あとはぼくによつて実現するはずのささやかな  
余生を夢みる

福祉事務所推薦の模範身障者

還つて来いという限りぼくは

あなたのその夢を踏みにじらねばならない

あなたの盃に銚子を傾むけたり

あなたの膝の上でぼくの息子を遊ばせはしないだろう

そしてあなたの臨終の耳もとでささやくだろう

八あなたは自分が何者であるか一生知りはしな

かつた▽と

あなたはその白い杖を鏡くあげて

八敵▽を指し示さなければならぬ

あなたの目から光と階級を覆い隠してきたものを

あなたに忍徳は美德だと教えたものを

あなたにその杖をあてがつたものを

そしてあなたはぼくに言わなければならぬ

遅れとではなく 征けと

あなたからの訣別が

あなたの位置へのたつたひとつの接近なのだから

ぼくは今、ムダとは知りながらも父をオルグしている。ぼく

らの論理を父らの言葉で（どうしても権力の言葉になるのだが）  
しかも意味を薄めずに伝える。この作業は時として、自らの思  
想の氣にとめていたかたスキ間の発見に役立っている。ぼく  
はまだ六十余年間抑圧され続けて来た父のどこかに階級の怒り  
を期待している。

△△△

ついでにひとつ悪作を披露して終りたいと思ひます。

快い静寂が漂つてきて

ぼくはまた試験管の中の変化を覗き込む

それは何にもまさる生の充実の一時

テニスコートのはずんだ音もよみがえった

ぼくが正しい人たちの敵だなんて夢にも考へられない

だってぼくは理性によつて求められた真理と

きれいな女の子を愛しているのだから

ぼくを敵だと呼ぶやつこそ

罪悪で野蠻で卑怯に決つてゐる

だけど夕暮れ時に決つて小さな不安が胸をよぎる

ぼくに安定した時を約束していた大時計が

今日もまたわざかな狂いを示したのだ

そう確かに△あの時△から.....

しかし、東大全共斗をはじめとする全国の学友諸君の斗いは、  
保身家どもに「快い静寂」ならぬさらなる恐怖を与え、大時計  
の針を吹つとばす勢いをみせていく様子、まことに頼もしい限  
りです。

五月二十三日 東拘より

渡辺 黙男（東大文共斗）

本当に充実した時間は、面会の5分間だけだ。

わざわざ、是非頼まねばならないこと、尋きたいこと、話しておきたいことなどを頭の中で整理し、話す順番も決めておくのに顔を見るや否やもうどちらになつて何から言いだしていいのか分らなくなつてしまふ。大変興奮してしまふらしい。そうして房に引上けてきて、何を言い忘れたのかに気付き、激しく嘆くというわけだ。このパターンは恐らく当分続くに違ひない。

たかく、やたらひとに会つて話がしたい。しかしだの人は駄目だ。いつ自然に口から出てくるのことば、全く明白であるにもかかわらずどこかアイマイな懐かしいのことば、「ぼくら」その「ぼくら」の中のあのひとやこのひとに会つて話がしたい。会つたならば会つたことが、話をしたらその言葉が そしてさまざまのしぐさが、そのニュアンスが、そのままほくの活力になる。ぼくはそれらのどのひとつも見逃さないよう緊張している。そしてこの緊張は、正直言うと、ときどき肉体的な欲求と区別がつかなくなることがあるくらいだ。しかし確かなことは、その時ぼくは一番底からの喜びの中にあるということだ。だがやはり、それと同時に苦しい。この苦しさはもう言うまでもないこともかもしれない。要するに金網の向う側

とどちら側とにひきさかれているということだ。それ以外ではない。そうしてひきさかれている。という言葉を使うのも、なにも甘い意味は無い。鉄条網と同質の「現実」が在るだけだ。

ところで、母や親類の人間には会いたくない／会うたびに疲れる、いやというほどんざりしてしまう。ぼく自身がぐったりして、肉は弛み、全身灰色になつていてのがはつきり分る。しかしほくは彼等を心配させないため、元気な声を出すよう努める。そこで、しまった！ といわけだ。彼等は、「空元気をつけているにすぎない」と判断するか、あるいはそのまま額面通り、「元気でいるな」と判断するかどちらかなのだから。いずれにしろからだが元気でさえあればあとのこととは言わない。という彼等の態度。むしろあとのことの方が話したい大切なことをだといふことに、彼等も気付かねはずはなかろうに。こうして偽りは次第に積み重なつてゆき、ぼくの手が届かなくなるかもしれない。彼等は、「ぼくら」の中の「ぼく」を理解できないため、あるいは無理やり「ぼく」だけをひきちぎつてきて対面しなければ気が済まないため、だから結局「ぼく」を理解しないために、一番とつつき易い感情に身を任せてしまう。すなわちぼくをかわいそうに思い、氣の毒がるのだ——「不幸な目に逢つて」「不幸な出来事に巻きこまれてしまつて」「だまさされたんじやないの！」 というわけだ。こうして彼等はいつもぼくの目の前で溺れてみせる。ぼくにしてみたら、ガソリンぶつかって車上がらせたいところなのだが、彼等はどうしても溺れずには満足できないらしい。ぼくには、彼等の目は、相手

を哀れまずには帰らない目のように見える、新聞やテレビでの世間認定済みを背景にした目のように見える、日常生活での通貨円のように見える。それがぼくの顔にどこか普通と違った人間のペルソナをかぶせようとする。そうしてぼくが、あれが欲しい、これが欲しいと頼めば、彼等の顔は喜びの顔に収縮し、「うんよしよし」と彼等は領づくのである。全く、ぼくにしてみれば腹立たしい妥協だ。

ぼくには、哀れみや慰めは必要でない。というよりかむしろひどく有害だ。なぜなら、犯罪者でも精神病患者でも病人でもないからだ。ましてや物欲亡者ではない。だから、からだや食料や衣料やその他の金品についてだけ話を交わすとき、耐えがたい不毛感にとらわれてしまうのだ。

(それでも「彼等」という言葉の持つひびきは、冷たじむろん絶望的時間がある。むしろそれは恐懼といった方がふさわしい。それはまるで一日の終りを重厚にするかのように、昼間薄められないなされた時間を一挙にとりもどすかのようにはいゴム質の時間のしきりをつくる。ラジオ放送が消え、就寝のオルゴールが、けつまづいてつんのめるような調子で、いつも同じの、そして恐らくこれからも変わることのないメロディー

を数往復して消え、光は電圧を下げられてナトリウム電球のような重苦しいものとなり(といつてもこの三者は殆んど一緒に自己主張し、お互にさまざまの「ズレ」のバラエティーを創り出す)、そしてぼくが寝返りをうつと、そのときから、この長い時間が眠つてしまふまで続くのである。そしてその中で、

いろんなこと、実際にさまざまの事物が、まるで一目見たきりでは黒褐色の平面にちがいないが、じーっと目を近づけてみると実にたくさんの人間のうごく姿が描かれている絵の中でのよう、浮き沈み、放り出され、倒れ、折り重なり、ふるえ、叫び、ねじれ、萎縮し、呻き、転げまわり、爆発し、霧散し、もうぐり、突進し、錯綜する。

そのとき、誰かが吠えることがある。あるいは、どこかの房で鉄扉をなぐることもあり、でかいクシャミをすることもある。それが屋内に反響する。そして独房々棟全体が、なにかその反響にじっと聞きいり意味をつかもうとしているかのように思われる。しかし問いかは放たれたまま還らず、反響は、きれいな放物線を描きながら次第にかすかになりついには無限の深みに落ちていってしまう——鎮静作用。そうして明日へのささやかなプランを立ててやがてぼくは眠り去る。  
……ほんとうだ、猿たちの檻は、あれはまったく広すぎる……

### 前略

五月三十日 中野より

T君 (東大J斗委)

長い沈黙を破って、オーバー便を送る。

少し長い手紙を書いておこうと思う。今までのところ、へ外で心配するような事は何ひとつ起こっていない。彼らは何しろ

ユーモアまで提供してくれるのだから。例えば、ここでは△非行少年ども▽をへ改悛▽させるために、つまり「矯正教育」として、しきりと△御託宣▽をたれるのだ。その中でも最も愉快なのは「非行少年の母」と題する詩吟の朗詠なのだけれども。内容は題から推して知るべし。「非行少年は過去を深く悔恨し、寝床に臥して涙をこぼす……。」とまあ、こんな調子で、ボクはおかしくて、とても立っていられないくらいなのだ。微罰さえ受けなければ「死ぬほど退屈な日々」という表現にもレトリックが感じられるようだし、死ぬようなことは何も起らないところ。

「何とここは△人間の生▽を重んじるところか、このブルジョア社会と同程度に」というI君の逆接でも引用したくなるくらい。

けれども五月二十七日（オ一回分離公判日）以来、ここも歓ぶべきことにボク達の秩序が甦えりつつある。統一公判を要求するボク達、手足をもがれたダルマ達の不自由な抵抗がそれでも波紋を惹き起こし微罰を受ける学友が、とみに増大している。そんな訳で二重に幽閉されないうつに、長い手紙書いておこうと思いついたのだ。

まず最初に完黙の我が讀えるべき水上<sup>26</sup>号君に対し、ボクは深くボクの不明を詫びなければならない。本当は君の顔でも思い浮べて書きたいのだけれど、如何に推理をめぐらしても、ボクは君が誰なのか皆目わからないのだ。本郷のA I S C の連中なら、君があれほど家族論その他を転回しているのだから、

わかりそうなものを。あゝボクは君にとつて何たる同志だ。婆婆での平素の疎遠を反省している次第。検閲で名前のところに墨をぬられても、三井君、I君のものは即ち誰だかわかったのだけれど、我々がこんなことでは彼らはますます調子にのつてこの有効なる△墨塗り作業▽に精を出すにちがいない。

けれども水上<sup>26</sup>号君、君の発した根源的自己表現の言葉の中には、君の見知らぬ他人たちの△生の緊張▽を喚起せずにはおかない△人間の叫び声▽が含まれているであろうし、現に君が誰なのか見当もつかないこの同志の名に値しないボクもその例外ではなかつた。

それからJ斗のI君、君の手紙も読んだ。極めて正統に読み了解したつもりだ。そして檻の中で君がいやらしくない程度に、肥えたり「明日のためのその一」とばかり国際式ボクシングならぬ、まわし蹴りのケイコなどをしていくのが想像されて、とてもおかしい。

△徹夜の討論を終えて、しばらくくつろぐ（パンチOnの千葉一郎君、（W君）▽も元気そうだから、例のブティト・アミィが毎日逢いに来ているらしいし、彼は不屈な面魂でボクも安心している、とにかく彼は威儀がある。

JのW君、二人のI君、M君

今こんな風にして、明確に幽閉されているボクは人間が言語でもつて自己を表現することの意味について一定の結論を与えている。

それは断絶されて生きている人達が自己と他者とを結合させ

ろべく発する叫びこそが唯一の生きている人間の▲生きた言葉▼なのだとこと。そしてボクもこのように文章を綴っている以上他者との結合▲糸▼を求める訳だ。けれどもW君それは例え不具な子供たちがせっぱ詰つて、涙ながらに語るあのいじらしい▲求愛の言葉▼でないのは無論のことだ。ボク達は自分の▲人間的欲求▼を阻んでいる対象物との抗争の中にしか、獲得されるべき真の結合形態（共同性）はあり得ないということを充分知つていて。それだからボクはボクで、鉄格子とコンクリートの壁に圧されながらも絶対に屈服せずにいるのだし、君も又そななのだと思う。けれどもこう書いていて自分の感性が捉えた暗い淵について、又自己の存在の根について、他者に伝えることはとても難かしい作業だと実感する。

「ボクがかつて四国の田舎に住んでいた頃、一条のあかりさえ見えない深く暗い霧の森の中を彷徨つたときの事、その時の幼ないボクの心の空に夕暮れ時のかね雲のように拡がつていった不安感、無力感について君に伝えることは絶望的に難かしい作業だ。」

もつともこの宣伝煽動活動が容易であれば革命もたやすいのだが。いろいろな障害があるものだ。

例えボクがもう少し若ければ、「この文章には氣負いがある」だの、「修辞だらけ」だのとくらいい批評に冷水をあびせつけられることもなく、ファンタティックに血潮を熱くしたそのままの自己を表現するのもしれないのだけれどと思つてみたり、又例え、ボクが感傷主義の露出症にでも陥つていれ

ば、ボクは▲檻の中の自演の後の失墜感▼についてとか、▲朝の実に不快な忌しい目醒め▼についてだとか、とにかくネガティブの極面を媒介にして逆接的に、ボクの情念の眞実について伝えることも可能かもしれないけれど、などとためらうばかり。一方では又ボクはもう若くはない、孤立に歳のき、共感を惹かれるあまりに、ヒロイックに悲鳴をあげたがるほどボクはもう若くはないのだといふ自意識のマムシが鎌首をもたげはじめるともうすっかり伝えることは绝望的に難かしいのだ。

ところでW君、君がまだアメフトをやっていた頃だろう、羽田斗争の後だ。商業ジャーナリズムはボク達に▲動物的、直線的▼という形容詞を与えたことがあつたんだ。惡意に充ちた形容詞として彼らは使用したけれど、善く解釈してもこれ以下の意味において、全く当つてゐるのだ。

格子の下のすき間から時折、小動物の生態を観察するのだけれど、彼らは例え発情した雀でさえ、（彼らは陽の光が強くなければ、性ホルモンが分泌されて発情するのだといふことを六年も前の受験生の頃習つたのを今、不意に思い出した。）、彼らは彼の▲求愛の情▼を確実に他者に伝えてゐるのだ。その証拠に少しばかり離れていても、たちまち意気投合して、たがいにくちばして愛撫したりしてゐるのだから。この小動物の発する▲啼き声▼は、文字通り動物的直載さにおいて、ボク達の発する▲叫び声▼より他者との結合を獲得してゐる。ボク達は連帯の言葉を捜しあぐんでいるし、自己表現に愚鈍で動物的でさえない。もつともバラバラに閉ざされて生きしていく猛烈社員など

とひつた言葉に踊っている人間たちはもつともっと愚鈍で、愚鈍といふより愚劣なのだけれど。

あゝ、ボクはいつもこんな風に、腰ほどの高さの羞恥心の垣根さえ飛び越せずに立ちどまつてばかりいる。

恐怖の垣根ならば、目を閉じても飛び越えてきたのに、しかし刑務所の堀はなんて高いのだろうか、気狂い的に高くとても飛びこせそうにない。けれども、これとて△絶望的に難かしい作業ではないだろう。I君、少しは理解してくれ。ボクはこの東大斗争の期間中、恐らく君の半分ほども、アジビラだの、学生大会議案書の原稿を書かなかつたと思うのだけれど、この生れつきといつてい頃からの、共同体へ手を指しのべることの含意の△しがらみ△から抜けられなかつたのだ。

I君、君もよく言つていたようにレフトウイングはボキヤブリ不足で言語障害症状に陥つてゐるのかもしれない。この悪並から大脱走を試みる端緒にでもなつてくれればこの手紙も充分なのだけれど。そして少しでも君達との間に共生感の芽が、ねばえるのなら万万才なのだけれど。

W君、M君、二人のI君、思想研同人のK君その他、東C、本郷そして全部のAISCの諸君、この△絶望的に難かしい作業△をのりこえるべく、共に叫び、斗い抜こうではないか？

ボクも絶対に屈服しないから。G・Sのオックスではないが、ボクは燃えている（一月二十九日）

69  
6・5・30 午后

T（△斗委）

PS. AISCの教対の人でも、誰でもいいんだけど、今度中野

へ「革命」を差入れにくる際にでも、ゴッホの「ハタンキョウ」の複製か、ゴッホ全集（河出書房？）をどこかで見つけることができれば、入れてほしいのだけれど。

ボクは今までここ的生活では、物質的にも精神的にも△ストイシズムの鎧△を堅固に被つてゐる事に決めていて桜の花が咲き匂うころ（丁度ボクは最初の輕屏禁と称する一週間の懲罰を受けて、運動、入浴、筆記、面会、文書その他一切禁止された時だけ）は以下のような惨めにひねこびた内容の手紙を田舎の友達の出したくらいだった。

「十六日、久し振りに運動場に出ると、桜の花は八分通り、春の寒風に散り注いでいたし、明くる日水っぽい雪が降りつも、次の日になつてみると、散り注いだ白い花びらたちは自潤で股間にまち散らされた精液さながらの日々しさでちこまつていた。ボクにとってこれはよかつた。絢爛と咲き匂うクライマツクスを迎えた桜の花のなまめかしさには耐えられない想いを抱いただらうから。ボクは春の真昼の白中夢は嫌だつたのだ。それは恐怖だ。」とまあこんな風にストイックな鎧のいささかのほころびにさえ気をつかい、とり繕つていたボクが、英國の五月もすぎようとしているのに、「ハタンキョウ」ブルルの春）を求めるにはこれまでよつとした小動物の生態観察が転機になつてゐる。

それは春に浮かれて地上に顔を出した恐ろしく憶病なモグラなのだ。この地下組織者はMARXがフランスの内乱（？）の中でいみじくも書いたような、この病める社会にあって、あら

ゆる基礎の下に、網の目の隧道を掘りめぐらし、遂にはその支配をくつがえし、地上に凱旋するであらへしたたかもののもぐらゝではなく、ひどく憶病を、つかの間の陽の光にさえ眩惑されて、全身感覚体にして周囲をうかがうといつたそんな悲壮なモグラなのだ。

そして不意にボクは啓示にうたれたみたいに、つかの間の幽かな陽の光にもどん欲であろうとする訳。

アメリカ帝国主義のベトナムでの敗勢、IMF通貨体制の危機、といふ戦後世界体制の根底的動搖の中で、ドルの威信を死守。回復すべく、ペントAGONのチンドン屋が、はるばる月へまでドサ回りに行きました。チンドン屋の屋号は SNOOPY。  
(スペル間違ってるかも?)とか言うのだそうな。

そういえば、去年僕はあの女の子に『Here Comes

SNOOPY』という漫画本を贈ったことがあつたっけ。

独房のドアにはつてあるカレンダーの女の子を五・六才位おませにしたような割と可愛いことだった。お琴とお茶それから生花をし、ある有名女子大英文科の優等生。

「獄中書簡」発刊委員会殿、諸君の呼びかけに応えてベンをとることにします。誤字が多いと思いますが、直しておいて下さい。

今日は、五月二十七日、朝の点検には、「分離公判粉碎」

を叫びました。多くの学友とともに訓戒を喰いました。そして何をあわてたのか、獄吏は、召換のかかっている学友を、朝の食事時間中に、房から裸のまま出していくのです。ド

アのすきまからチラッと見えました。個別警報をじっとしたま

ま見るといつのは何とも言えず悔しいものです。僕の方は、六月二十六日と七月一〇日に御指名がかかることになります。

今日から、六月二日まで七日間ハンガーストライキを行うつもりです。場合によつては無期限に延長します。今日はハンストオ一日目です。何かのことで懲罰房へブチ込まれれば、諸君への音信もこれかぎりになるでしょう。

## 五月二十七日 東拘より

湯島 浩治(京大)

「獄中書簡」発刊委員会殿、諸君の呼びかけに応えてベンを

とることにします。誤字が多いと思いますが、直しておいて下さい。

今日は、五月二十七日、朝の点検には、「分離公判粉碎」

を叫びました。多くの学友とともに訓戒を喰いました。そして何をあわてたのか、獄吏は、召換のかかっている学友を、朝の食事時間中に、房から裸のまま出していくのです。ド

アのすきまからチラッと見えました。個別警報をじっとしたま

再確認していたら目頭が熱くなってきた。周囲の誰にも気付かれまいように寝たふりをしながら、まぶたに手をあてていた。

あの女の子は僕の過去の日常性の象徴であった。「帝国の臣民」としての「家」の「母」の残像を、あの女の子に投射するとともに、過去への、日常的支配秩序への還帰点として、あの女の子は存在していた。

今度の長期勾留では、「自己否定」さるべき過去の延長としての自分がパンチを喰ったにすぎなかつた。「自己否定」をくり返し、未来への飛躍として現在を生きようとする自己をあらためて確認することになった。

「自己否定」とは非常に口の中でつぶやくものではない。僕に関していうならば、中学・高校と受験予備校的な私立学校でただ太学入試のみを目指して時を過し、その学校を、「学業態度行動優秀賞」とやらをちようだいして卒業し、京大にすべり込んだ自己の存在を否定し尽すことであった。くり返し生産される人間関係の中に存在している者が、自己を否定するということは、自己をかくあるものとして存在せしめているもの、即ち社会体制を否定することへと發展せざるを得ない。所謂「自己否定」をして出世コースからはみ出た者は、単に出世コースから脱落したのではない。出世コースの存在そのものを否定し実際に粉碎していくことによって、「自己否定」が完遂される。

自らの意志と手で、或いは、大学当局や国家権力の手で、過去の延長としての現在を徹底的に人間的生存の原点にまで剥ぎ

取られつくした者は、自己否定をくり返す自己に絶大なるウイを叫んで、自己の生存を、帝国主義を死に追いやるがん細胞へと転化せしめるだろう。このがん細胞は帝国主義の全ゆる部分に転移し、増殖する。しかもこのがん細胞達は自らを組織化するのだろう。

一・一八・一・一九は、帝国主義にとって耐えがたきまでの苦痛になつたがん病巣を取り去る巨大な手術であった。しかし、このがんは全国いたる所に転移してしまつた。このがん細胞の増殖力・生命力の源は、個々のがん細胞の内にあるといつよりは、個々のがん細胞を結合せしめ活動せしめた「自己否定」の論理の内にあるようと思う。勿論、これは組織実体を無視することを意味して言つたのではない。また、僕自身、「自己否定」によって東大斗争を全て語りつくせるとは思わないし、自己否定は東大斗争のある一面を物語つてゐるにすぎない論理であろう。僕にとって「自己否定」は以上のような意味をもつていた。各学友諸君の意識は何らかの形でこの自己否定の論理が連つてゐるのではないかと思う。客体の主体化、主体の客体化の弁証法を、個々の人間を中心にしてみるとならば、それは、客観的対象の変革を媒介とした自己変革、即ち「自己否定」の論理となる。

ただなんとなくベンをとり、なんとなくベンを進め、なんとなくベンを置くことになつたような感がします。まだハンスト一日目だと、うの腹の虫が鳴いてゐる感じかも。次回からはもっとマシな文を書くようころがけます。

四月二十四日中野より 佐々木 九（仮名）

ない!!

獄中からの闘争宣言

“はたちになつて一砦の日和見主義者はかく語りき。』

”英雄的に斗つた砦の闘士……僕らは玉碎者ではあつても

”英雄的な云々の修飾語を拒否しなければならない。

僕らは決して、現今の状勢にあつて、僕らの側から見ても、あの様な出方をすべきではなかつたのだ。少なくとも、斗いの始まりはそうであつたのだ。

ある人々は、あの様な斗いを、好んで起し、賞賛するである。しかし僕らはやはり、僕らがあそこから自主的に出てくるはずであつたのだ。そして、その時から、あの『象牙の塔』は生きかえつていなければならなかつたのだ。斗いの本質が僕らの側にありながらも、あの様な一結節点を見なければならなかつたといふ点に於て、東大全共斗の諸君はきびしく自己批判しなければならないであろうし、まして彼ら以上に僕ら他大学の、少なくとも、『斗いを志向する者』の名に於て、東京大学と同質の矛盾のもとに一資本制公教育の矛盾の下に、僕らが包摂されていながら、あの東大斗争と質に於て連帶した斗いを組み得なかつた、あの東大斗争を象徴としてしか斗えなかつたといふ点に於て、まさに、『左翼』の名に於て、きびしく自己批判しなければならない。その意味で、僕らは日和見主義者とも呼ばれるを得ない。僕らが裁かれなければならないとすれば、まさにこの一点に於て、『人間』の名に於て、裁かれなければならない

もちろん、僕ら以上に自己批判をせまられなければならないのは、日本共産党『民青系』、並びに、右派系の、学園防衛ブローグの諸君であろうし、あのいまわしき、大学当局『加藤執行部』一万学友を、否、本当に人間たろうとする人々を見事に欺いた男、僕は彼が何故に本質的でない收拾をしておいて、涙まで流したのか考えているが……。せめて、どうして、井上正治九大教授位、自己変革しなかつたのだろうか？ひょつとして彼は、『ガクチヨウセンセイサマ』になりたかつたのでは（日共『民青流ひはん』）一であることは言を待たないだろう。

しかし、私は決してあの斗いを過小評価しているのではない。諸君！僕は二度も諸君を、そして自分を裏切ろうとしたのだ。俗物的なものが、本質的でないものが、変革の意志のひ弱な僕を、最初は強烈で熱っぽい苦しみが、へどをはきたい様な食欲のない日々と、銳く胸をえぐられる様な痛みをもつて、そしてその次には、ぐったりした無氣力が僕を悩ましめた。

全く変革を志す者にとって、如何なる職につくとか、親の期待や、友人や知人らとどうしていくのか、これらは全く『本質的でない一切のもの』なのだ。まさにボール・ニザンの語るが如く、『私はこの時期を人生のうちで一番美しい時期だなどと誰にも……。』

留置場である同志が言つた。『僕らはいい子である事を拒否しなければならない。』そうなのだ。僕らは少なとも運動を志向する以前までは、いい子として育てられてきたのだ。

しかし、僕らをいい子として育ててきたこの社会に、偽りや、  
偽善や、虚栄や退廃が、欺瞞的なものが人々をちつ息させるほど充満している事を悟り、それらと非和解的に対決しようとする時、もはや僕らはいい子ではいられないのだ。

そして僕らにとって、故郷とは、南米解放の無名の戦士エルネスト・チニ・ゲバラにとって、南米や、すべての第三世界がそうであった様に、そこに闘いがあつて、僕らが役に立つのならばどこでもよいのだ!!

ここで、僕がどうやら倒れかかるのを防ぐ事ができた事に、大きな力となつた一人の友人の事を書くのは、この文意のためにはより効果的だろう。

「私はあなたの現在おかれている立場に、少なくとも同情だけはしません。」連帯を拒否したところに同情が生まれる。あなたのために考えることは復讐の二文字でよいでしょう。「こう言つて、僕に連帯の意を表明してきたのは、僕の高校の同窓生であつた。卒業以来、一切親交がなかつたが、ふとした事で僕をたずねて来た。彼女は大学を退め、全く異つた方面を志させて僕の大学を受けて來たのだと語つた。あの彼女が『私はボロボロの自分を学問の前で打ちのめされたい』。『こう語り、女のくせに物理を専攻して、栄冠ある大学の門をくぐつたひとつだつたのだ。

鋭い洞察力と潔べきまでの謙虚さをもつた彼女は、成績もさることながら、絵にも卓越していく。又、校友会誌には、ある若い画家と彼の自殺を描く事によつて、一体自分などが生き

ていて何になるのかといった主題を唱えた私小説的なものだつたし、又、もつとも最底の一他人に迷惑のかからぬ飢餓という方法によつて、自殺を試みた人でもあつたのだ。それから、こんな事も言つていた。』歎喜もいい。悲哀もいい。自分を厳しくしてくれるものはすべていい。』

『変革、私の求めたもの、自分を内側から、根底から変えること。だが、それは一体どこにあるのだろうか。私はただ、現実のべつとりとした連続を感じる。』出発のあの輝かしい二字はもうどこを探しても無いのだ。自らの忌むべき過去、過去のそれとのあまりにべつとりとした連続、無力感、自嘲、それは精神まで階級社会に食い物にされた何よりの証拠ではないのか。

あなたの歩みだした道、そして私のやろうとしていること。それは一つのアンチ・サクセス・ストーリーかもしれない。しかし、私は、ささやかなサクセス・ストーリーとして自らの生涯を形成することを拒絶したい。

昨年は苦しい年だつた。私にとってそれがたとえ下積みのささやかなものであれ、研究者の道は魅力的だつた。一つの原子核の中に思想がある、このシユレーディングナーの言葉をじつと胸に抱いていた。しかし、今の私は、学問のための学問、学問至上主義は信じられない。東大全共斗の山本氏は自らの立場を学徒と規定していた。しかし、私は（山本氏のような立場からの運動を否定することはできないが）自らを『学徒』と規定することはできない。……略……革命、かくめい、展望が欲し

い。万民の実質的平等。社会主義体制を単なる計画経済の問題

に解消してはならないのだ。チエコ問題の起つたころは全く混亂、ハンガリー動乱の時に比較して日共は全く終始一貫しない。

矛盾だらけ。

かくめいが全てだ、二十四時間かくめいへの志向、だから学生であることを否定する。と或る人に言われた時は動搖した。……略……今、フレヒトの詩句がぼんやり浮びます。

どんな時にも「もうだめだ！」と言つてはならない。……我々は抑圧された我々の今日のために斗う。

漠とした『明日のために』ではなくあのいい古された『明日』のためにではなく、我々の抑圧された今日のために斗う。あの、いつも全く静じやくで、莊嚴なおももちの彼女の口から『かくめい』や『階級社会』や『民育』をくずしていく『この様な激しい言葉を聞くのを、どうして僕は想像する事ができただろうか。

『面会の時、彼の口にした』挫折といふことは。

今私のにはその重みが痛いほど感じられる。一現在、私達の前にある困難は、それが容易にすわりの良い『挫折』感に転化してしまうことで、より困難なもう一つの困難を内包している。それは私達に向つてくる困難であるまえに、私達の内側に、私達を裏切りながらひそかに成長してくる困難であり、私達にとってほんとうの困難は、私達が既に私達の内部に用意してしまった。そのもう一つの困難なのだ。――

長安に男子あり

## 二十にして心已に朽つ

挫折、それは或る意味では快い。断じて右の李賀の詩に或る種の共感を抱いてはならないのだ。『

この言葉はどんなにか明瞭に、その時の僕をとらえていただろし、どんなにか力となつた事だろう。そして彼女のさし入れてくれた、クロード・モルガンの『人間のしるし』（岩波現代叢書）も！

まさに、そなただ。僕らが本当に真実の声を聞こうとするのなら、僕らはどんなに傷つき、疲れ、倒れかけても、決して安らかなベッドを求めてはならないのだ。ある人々にとつて、それは唯一の『安息所』ではあっても、僕らにとつて安らぎの床とは、それがどんなにみじめなものであつても、本当に真実の声を聞いた時なのだ。

僕らは確かに『瀬戸ぎわ』に立つてゐると言えるかもしけない。これから長い間消耗な手続きと時間とにさいなまれるかもしれない。しかし、その拘束から解き放たれ、より『自由』な道を選ぼうとする時、同時に僕らは、僕らが本来的に拘束されるべきだつた世界からも解き放たれてしまうのではないだろうか。

僕はどうやらこんな事が言えるようになつた。再び話を彼女のところにもどそう。

彼女は始めはこう言つていたのだ。

『発表の二・三日前、もう二期を受けるのはやめようと考へていた。合格の自信はなかつた。落ちたら労働者にならうと思

……わた。新聞の求人欄で心ひかれたのは、印刷工（見習）とビルの清掃員だった。下層労働者……そして何か組織に入ろうと思つた。

落ちた日印刷所へ電話した。その人事の係の人と応対しながら、自分が女である事、更に言うならば小娘に過ぎないといふ事を感じ続けていた。印刷工…それすら女ではないのだ。女にできる事（と一般に認められていること）それは文選でしかなかつた。文選すなわち活字ひろい。

それから暫く頭をかかえて考えていた。私は印刷工になれない。清掃人夫になれない。下層労働者になれない。つまらない愚かしいプライドがあるのだ。それは認めざるを得ないことだつた。印刷工、それは言葉としてはむしろ美しい。下層労働者、それは抽象的概念としてはむしろ美しい。しかし、私はなれない。今はとても。實際、一生身をかがめてビルを見のがないのだ。

知識人、知識階級、それは最下層の労働者と敵対する存在なのだ。頭をかかえながら、大学へ行こうと考えた。二期も落ちたら、新聞配達でもしながら、浪人しようとを考えた。實際問題として、私は最下層の労働者になれない。汗と泥にまみれて、一日の間、何も考えずに働き、そして、収奪されて（肉体的にも精神的にも）ぐつたりと寝てしまう。そんな生活の中で、ものを考え、本を読み、常に醒めていることができるだろうか。綺麗ことは、言いたくない。今、全く、支離滅裂。大学に行つて、歴史、経済・政治・法律など、学びたい。（講義には、

期待していないが。）などと言うのも、今のいいがげんな自分の正当化でしかない。しかし、どうにもならない。したり顔で知識人の役割云々など、言う気はさらさらないが。

自分にただ、思い上るな、逃げるな、気負うな、と言いかかせる。とにかく一生続けるためには、気長にやること。やはり、最下層の労働者からしか、真の「かくめい」は生まれない様に思う。

学生運動をやることだつて、単なる免罪符に転化してしまう危険は、常にある。急進的なつもりでいることだつて、単なる自己保身に過ぎない場合もあり得る。欺瞞一にして、四月の便りには、こう語つた。

”……略……。以前、大学をやめる時も、親に相談せずに、ひとりで決めてしまつたので、今さら親に全面依存はしたくない。四月から、新聞配達をしています。甚だ薄給ですが、何とかやっていきたいと思います。まだ見習い中。もつと割のいい収入源もあるだろうが、肉体労働がやりたかったので。

かくめい。高級技術者とか、研究者という立場での改革には、疑問がある。かくめいを、プロフェッショナルに追求していくことしかないとと思う。具体的戦術は、今のところなし、……略……。

学校をやめてから、今まで接觸のあつたのとは異なる人達に触れ、その時、自分のしてきたことは、何ら特殊なことではないという事を感じた。何も、大げさに騒ぎたてるほどのことはない。

ひとりの人間が、大学→大学院→研究者（のはしきれ）と進もうと、大学→中退→下層労働者となると、そこに何程の差があるというのか。私が前者を捨て、後者を選ぼうとしていることは、むしろ当然なのではないか。苦し気な顔などする必要は何らない。

昨年の十月、大学を止めた時、それ以前半年位やめようと考えていた頃、その頃と、今考えていることはちがう。大学を止めた時に於ては、所謂労働者になろうとは、思っていないが、そのあたりのこと、高校生の時のこと、それはもう、思いだす必要も、ない」とのようだ。

この一年、勉強したい。思想などといふ、大げさなものでないにしても、何か、しっかりとものを持つた。

レオポルド社で出している、A・バーヨのグリラ戦教程を買つた。その後についている編集部のコメントの欄に、次の様なことが書かれている。

――前略……したがつて、読者は公然と（//）本書を入手しうるニッポンの幸福さを、身にしみらせた限りに於て、本書に述べられた「技術」の修得に、慎重であつてほしい。塩素酸カリを入手することさえ、「火薬取締法」にひつかかるのだ――

日本のどうぶくさ。やはり、暗たんとした氣持にならざるを得ない。』

まさにそうだった。今回のがなかつたら、僕は『免罪符』

の学生運動に、別れを告げ、やがて、観念的ヒューマニズムに、逆もどりしていただろう。

彼女は、見事に『過去の己れとのべつとりとした連続』を、断ち切つたのだ。それは、如何なるものであつたにせよ、彼女にとつては、唯一資本体制的なものだつたのだ。

僕は恥かしかつた//しかし、どうにもならない。今、全く、支離滅裂と、言つていた頃の彼女に、何ら、語るところを知らなかつたのは、もちろんけれど、彼女のあのひ弱な小さい身体が、小さな細い腕が、小さな手が、朝の寒気の中で、新聞をくばる姿は、鋭く僕を、告発するのだった。今まで僕を悩ませたものの事を考へると、鋭く胸を、えぐられるのだった。

この獄の中で、彼女の手紙を読んで、本当にこみあげるものを、抑えられなかつた。本当に苦しかつた。

そして、今度は、僕の方から、連帯の意を表明する立場になつたのだ。僕が、この一人の『かくめいか』と、本当に連帯するためにも、この法廷という、消耗な戦線を、決して、消耗に終らせるところなく、斗うことを決意しながら……。

否、それだけではなく、僕も一人の『かくめいか』たらんとして。

やがてこれを去り、故郷に帰つた時、母は、私の胸に飛び出すがつて、老いて衰えたその腕で、僕の胸ぐらをたたきながら、泣くだろう。しかし、その時、僕はほほえんで、『お母さん、元気ですよ。僕もはたちになりました。』と、言えるだろう。

はたちになつて、よかつた。俺は、留置場ではたちになつて、  
本当によかつたのだ。

## 八 救対通信

### 情宣部

五月二十七日より、分離公判強行が開始された。我々の分離公判粉碎斗争は、獄中の学友諸君の実力斗争（出廷拒否斗争）を主軸に、法廷内での裁判官訴明要求、裁判所をとりまく連日数百名のデモ隊により、完全に勝利的に進行している。

五月二十七日安田講堂（十六）分離公判は被告十名、中監者九名、一名保釈、当日八名の学友は裸戦術で出廷拒否を貫徹。一名は看守数名からの殴る蹴るの集団暴行による強制連行を受けた。しかし、保釈中のため出廷した学友とともに、暴力的分離公判強行に対し、裁判長に抗議追及を行ない、弁護人、傍聴人とともに憲法、刑訴法にさえ違法な分離公判は認めることができない、として全員退庭することで、第一回分離公判を粉碎した。

五月三十日第二回分離公判、安田講堂（六）、被告十二名、うち在家起訴二名、全員出廷拒否を貫徹し、法廷被告席はゼロ。

第二回分離公判も見事に粉碎した。

獄中学友の果敢な出廷拒否斗争により、次々に分離公判を粉砕された浦辺裁判長は「被告らが何ら正当な理由もなく出廷拒否を続けるならば、欠席裁判もやむを得ない」と訓喝を加えてきた。我々は浦辺のこの言葉に、東京地裁の、國家権力の東大

斗争裁判への、弾圧体制の一環としての分離公判に対する並々ならぬ決意を見とることができる。

六月三日までの三回の分離公判を試験台に六月十日より全面的分離公判強行を狙っている。連日の如く、しかも政治的配慮を測りつつ欠席裁判を強行しようとしている。まさに階級裁判の開始である。獄中の学友諸君、看守らのデマ（東拘では、全員出廷したなどというデマを流している）は絶対に信用すべきでない。刑務所、拘置所は公判に関する報道を一切ぬりつぶすことで、公判斗争の進展をシャットアウトし、獄中の学友の孤立を狙っている。我々は接見活動を強化することにより、かかる刑務所の陰険な弾圧を粉碎しなければならない。

六月七日東大工学部大講堂で、東大斗争統一公判勝利のための公開討論会を開催する。各地域救援会で活動している人々、各大学で斗っている人、救対をやっている人が結集し、分離公判粉碎斗争の意義、救対と斗争との連関等についての討論会をもつ、我々は六月十日以降の分離公判を圧倒的大衆斗争として粉碎していくであろう。獄中の諸君のより強固な团结と、出廷拒否の貫徹を期待する。

### 分離公判粉碎日程表

月日	曜時間	法廷	グ ループ	裁 判 部
六 十 火 十 ・ 〇 〇 セ 〇 一	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	安 田 十八	刑 四 (木梨)	
十 火 十 ・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	ラ ビ ー 場 (II)	刑 十 六 (浦 辺)	
十一 水 十 ・ ・ ・ ・ ・ ・	・ ・ ・ ・ ・ ・	医 中 央 館	刑 二 十 (牧)	

六 二 四 四 四 四 四 四	十三木 二木 土 士 士 士 士 士	十一 三 二 二 二 二 二 二	二〇〇 二〇〇 二〇〇 二〇〇 二〇〇 二〇〇 二〇〇 二〇〇	七〇三 七〇二 五〇三 五〇三 五〇三 五〇三 五〇三 五〇三	法研（四） 安田（三十） ラグビー場（三） 安田（十七） 安田（十） 安田（少年） 安田（十九） 安田（八） 安田（六） 安田（七）	刑八（小松） 刑五（堀江） 刑九（柏井） 刑三（播本） 刑十六（浦辺） 刑二十（牧） 刑九（柏井） 刑四（木梨） 刑十六（浦辺） 刑十二（熊谷）
八 八 八 八 八 八 八 八 八 八						

どのような状況にその身を置とも、ただそれだけで免罪される事はない、と考えて、「斗う」とは何かを模索する。

(朗)

ぼくは生まれた おまえを知るために  
おまえに名づけるために

自由（リベルテ）と。——エリュアール

ぼくは生まれた おまえを知るために

おまえを獲得するために

自由を

(真崎)

獄中書簡読者諸君、六月十日からの地裁の全面攻撃に対し、  
我々の圧倒的結集をもつて粉碎しよう。獄中の学友との連帯は  
斗う中にのみ存在することを銘記ねがいます。

△救対情宣部▽

バックナンバー有。一部送料共七十五円。（但し六・七合併  
号のみ百二十五円）代金を添えて左記宛お申し込み下さい。

なお定期購読御希望の方は、何号からと明記の上五五〇円  
(八号分)単位でお申し込み下さい。

発送は事務の都合上二週間に一度になりますので御諒承下さい。

追分内

「ぶりずむ社」(発送センター)

代表・代行 加藤五郎

(銀行振込 第一銀行 本郷支店)

言葉のようこばしい洪水が私を襲い、私の中にひそかに燃えていたものを荒々しく、したたかに表現してくれた。獄中の同志、及び友人諸君。たくさん手紙に感謝する。とても掲載しきれず、次号にまわす。悪しからず。

火夜里子

!! 無 断 転 載 禁 ず !!  
非 壳 品

第八号第一版 六月八

六月八日發行

△連絡先▽文京区向丘一の十二の七

真崎猛哲